

編集後記

■「早稲田大学国語教育研究」は本号で第三十集となった。記念号として、「早稲田の国語教育」というテーマを掲げ、これまでの歴史を踏まえた多くの論文や報告を掲載できたことは無上の喜びである。昨今の慌しい教育環境の中で公私共にお忙しいところ原稿を寄せてくださった皆様に、心より感謝申し上げたい。第一集が刊行されたときは大学入学前であった私は、原稿を拝読しつつ、この三十集の歴史の重みをひしひしと感じた。現在のような組織を持つに至ったのは、諸先輩方の熱心な活動によるものであり、「早稲田の国語教育」が発展してきた証でもある。

■しかし、歴史が古ければいいものではない。ただ形式だけを踏襲して継続だけを目標にするような学会や学会誌であってはならない。今回の第三十集の多くの論で語られている「早稲田の国語教育」の歴史から、私たちは多くのことを学ぶことができるが、それを今後の国語教育にどう生かしていくかが重大なことである。今までの伝統に恥じない新しい歴史を築いていきたい。

■本誌の「現場から」を毎号読みながら、現場で生徒に向き合い授業に工夫を凝らしている会員の皆様の姿を想像しては、自分に置き換えて刺激を受けている。私はややとすると日々の校務の忙しさにかまけて国語教師としての本分を蔑ろにしてしまいそうになる。ルーティンワークとして無自覚に授業をこなし、吟味しない授業計画を立ててしまう。そういうときに、学会や研究会に

参加しあるいは本誌を読み、全国で国語教育に関わっている先輩や仲間の報告に触れると、励まされるような気持ちになり、思いを新たにすることができる。理想としては、学会に参加し、問題意識を共有し、そのことによって日々の授業を充実させ、その授業の成果を今度は自分が学会で報告し、さらに問題を深めていくという流れが作ればよいと考える。

■川副国基、時枝誠記、白石大一、榎本隆司という名前が本号には何度も登場するが、「早稲田の国語教育」を支えてこられた諸先生・諸先輩方は、国語教育に尽力されながらも、日本語日本文学においても研究成果を挙げてこられた。また、本学会の例会・大会でご発表される方々は忙しい現場にありながら常に研鑽を怠っていないということが、その発表の端々から伝わってくる。本号の中で、町田守弘氏は、「国語教育研究においてまず求められるべきは、日本語・日本文学の研究だ」という主張は、本稿において繰り返し主張した早稲田大学における国語教育の原点になると思われる」と指摘している。かくして第三十一集のテーマは「文学・語学研究と国語教育の連携を探る」となった。それぞれの現場でそれぞれの立場で研究し教育に携わっている会員の皆様には、身近なテーマともいえるのではないだろうか。テーマは柔軟にとらえていただき、さまざまな観点からの実践報告、論文、提案等多数の投稿をお待ちしている。

(石出靖雄)

早稲田大学国語教育研究 第三十集

二〇一〇年三月三〇日発行

発行所

早稲田大学国語教育学会

代表

千葉 俊二

東京都新宿区西早稲田一、六、一

早稲田大学教育学部内

振替〇〇一六〇、一、八五二七番

印刷所

株式会社 研恒社

東京都千代田区九段北一、二、七